

平成28年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

平成29年5月8日

代表者 綿井 雅康

研究課題名	自己アセスメント型心理教材を用いた「生きる力」育成モデルの検討
研究期間	平成28年6月1日～平成29年3月31日
共同研究者	
1. 今年度の研究概要	
<p>【目的】</p> <p>本研究の目的は、中学校生徒を対象として、自己アセスメント型心理教材の継続的な実践が「生きる力（＝自らを律しつつ、他者と協調し思いやる心）」の育成・向上に寄与しうることを実証することであった。特に地域に貢献しうる研究実践という視点および自己アセスメント型心理教材の実践自体に対する評価を確認するという視点から、新座市教育委員会と連携し、市内中学校の理解・協力を得て、心理教材の実践および心理測定に取り組むこととした。</p> <p>【方法】</p> <p>(1)自己アセスメント型心理教材の実践：教育委員会・教育相談センターと協議し、2つの中学校を選定した。各校の管理職および関係教員に対して、本研究の目的および心理教材に関する説明を行い理解を得た。各学校の学事予定に基づいて、心理教材の実践を組み込んでもらい、F校では9月下旬に1学年全体(167名)で実施、S校では1・2年のうち6学級(205名)で実施した。</p> <p>(2)「生きる力」測定：本研究での定義に基づいて、「中学生用自己価値の随伴性尺度(大谷ら、2010)」、「二次元レジリエンス要因尺度(平野、2010)」、「非柔軟性尺度(Ishizu et. al, 2014)」の質問項目を用いて質問紙を作成した。心理教材の実践後に数日以内に、本質問紙に回答してもらった。</p> <p>(3)心理教材の実践結果に関する検討会の実施：心理教材の測定結果を研究者が分析した後に、各学校の担任教員または管理職との検討会を実施した。検討会では、学級を単位として、測定結果に対する研究者の分析結果を説明し、教員・管理職の生徒理解の様子との一致・不一致などについて協議を行った。合わせて、生徒の回答状況についても具体的な情報交換を行った。</p> <p>(4)自己アセスメント型心理教材・「生きる力」測定の反復実施：本研究の申請に基づき、反復実践が「生きる力」向上にもたらす効果を確認するために、<u>代表研究者の個人研究費を活用して</u>、一方の学校について、2度目の実践・測定を行った。</p>	
2. 研究の成果	
<p>本研究の目的（自己アセスメント型心理教材の継続的な実践が「生きる力（＝自らを律しつつ、他者と協調し思いやる心）」の育成・向上に寄与しうることを実証する）に即して、年度内に反復して実施した学校での測定結果について分析を行った。</p> <p>(1)「生きる力」測定の整理：生徒の回答結果をもとに、各尺度について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行って下位構造を確認した。その結果、「中学生用自己価値の随伴性尺度」については、「運動能力」「友人関係」「学業能力」の3領域に分類されること、「二次元レジリエンス要因尺度」および「非柔軟性尺度」については、「問題解決志向的レジリエンス」、「他者心理の理解的レジリエンス」「非柔軟性：否定的状況受容」の3領域に分類されることを確認した。</p> <p>(2)「生きる力」の変化分析：生徒の「生きる力」に関する態度や能力がどのように変化したのかを確認するために、全生徒を対象として、1/2回目の測定結果（得点）を集計して分析した。領域ごとに対応のあるt検定で比較した結果、6領域全てにおいて2回目の方が得点が高くなって</p>	

いた。レジリエンスの「問題解決志向」と「他者理解」は得点が高いほど「生きる力」が向上していることを表すが、「否定的状況受容」は逆の結果を表している。

表 生徒全体での変化

		自己随伴性			レジリエンス		
		運動領域	対人関係	学業能力	問題解決	他者理解	否定受容
1回目	平均	1.74	1.49	2.23	1.91	2.06	1.79
	S.D.	(1.02)	(0.94)	(0.85)	(0.84)	(0.79)	(0.79)
2回目	平均	2.32	1.68	2.58	2.08	2.25	2.02
	S.D.	(1.10)	(1.04)	(1.00)	(0.98)	(0.88)	(0.84)
t値		7.84***	2.70**	4.78***	2.329*	2.96**	3.58***

註) *:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001

(3) 心の状態変化に基づく生徒の分類： 心理教材の測定結果は「心のエネルギー」「社会生活の技術」の2つの領域得点に集約することができる。そこで、2回の実践に参加・回答した生徒について、2つの領域ともに得点が増した生徒群（以下、上昇群）、2領域ともに減少した生徒群（以下、下降群）、それ以外（得点が増減しない生徒、一方が増他方が減少した生徒）の生徒群（以下、同一群）に分類した。

(4) 心理教材での測定結果の変化と「生きる力」の変化との関連について： 生徒の「生きる力」の変化は、中学校を中心とした学習活動や学校生活全般を通して獲得されたものであり、心理教材を実施したことが大きな影響を及ぼしていると想定することは難しい。その一方で、心理教材の測定によって表された「心のエネルギー」や「社会生活の技術」を生徒自身がどのように把握・回答しているのか、という結果と「生きる力」の状態とは一定の関連がみられると考える。そこで、(3)で述べた変化による生徒の分類3群の間で、「生きる力」の6領域の変化を集計した。

表 得点の変化量(2回目-1回目)の比較

		度数	自己随伴性			レジリエンス		
			運動領域	対人関係	学業能力	問題解決	他者理解	否定受容
上昇群	平均	65	0.69	0.15	0.39	0.39	0.44	0.27
	S.D.		(0.95)	(0.93)	(0.98)	(0.93)	(0.84)	(1.03)
同一群	平均	35	0.40	0.09	0.39	0.29	0.19	0.16
	S.D.		(1.03)	(1.05)	(1.02)	(1.04)	(0.81)	(0.84)
下降群	平均	60	0.55	0.34	0.33	-0.11	-0.06	0.28
	S.D.		(0.82)	(0.82)	(0.90)	(0.80)	(0.68)	(0.61)
F値(2,159)			1.184	1.058	0.070	5.095***	6.593**	2.318

さらに、変化に群間で違いがあるのかを確認するために、領域得点ごとに対応のない1要因分散分析を行った。その結果、「問題解決」と「他者理解」において有意な差がみられ、心理教材で測定した「心のエネルギー」と「社会生活の技術」がともに上昇している生徒ほど、ともに減少している生徒に比べて、向上していることが明らかになった。

(5) まとめ： 研究者は自己アセスメント型心理教材（KJQ-M）と生徒指導／学級経営との関連について学校現場を中心とした研究に取り組んできた。特に、教師の働きかけ・生徒の取り組みが「心のエネルギー」「社会生活の技術」をどのように向上させるのかに関する知見を蓄積している。そうした成果をもとに、本研究を展開した2つの中学校に対して、本研究の結果をフィードバックする会合を実施しながら、生徒の「生きる力」を向上させていく方策を検討する予定である。

3. 研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

日本教育心理学会第59回総会（名古屋大学、平成29年10月、ポスター発表）

平成 28 年度(2016 年) 研究概要

研究所・部門	プロジェクト研究
研究課題名	自己アセスメント型心理教材を用いた「生きる力」育成モデルの検討
研究代表者	綿井雅康
研究期間	平成 28 年 6 月 1 日 ~ 平成 29 年 3 月 1 日
共同研究者	なし

1. 研究成果取組状況

(1) 国内外の学会発表

状況	発表者, 発表課題, 学会誌名, 発表年月日, 発表場所	招待講演
発表済	綿井雅康・加藤陽子、「『精神的充足・社会的適応力』評価尺度による心理的柔軟性の育成」、日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集 PG67、2017 年 10 月 9 日、名古屋国際会議場(名古屋大学)	
発表予定		

(2) 雑誌論文(学内紀要含む)

状況	発表者, 発表課題, 学会誌名, 発表年月日, 発表場所	査読有無
投稿済		
投稿中 投稿予定		

(3) 図書等の出版

状況	発表者, 発表課題, 学会誌名, 発表年月日, 発表場所
出版済	
出版予定	

(4) シンポジウム・講演会等の開催

状況	主催者名・協賛社名等, 講演(発表タイトル), 実施年月日, 実施場所
開催済	
開催予定	

(5) 本研究に関連して本学経費以外に支援を得た補助金など

年度	機関・財団名, 事業名, 課題名